「棉花飢饉」後のイギリス綿工業-1864-66年の「好況」過程-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学経営学研究所 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 植田, 眞弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12031

経営論集
32巻3号
1985年3月

「棉花飢饉」後のイギリス綿工業

——1864—66年の「好況」過程——

植田眞弘

目　次

序
I　第1期（1864年1月—10月）
II　第2期（1864年11月—65年4月）
III　第3期（1865年5月—66年5月）
むすび

序

資本主義のいわゆる自由主義段階（1820-60年代）におけるイギリス経済は，激烈な恐慌を伴なったほぼ10年周期の規則的な景気循環を繰り返しつつ，拡大していった。そして，この規則的な景気循環のあり方を基本的に規定していたのは，産業革命期以降，産業資本的蓄積を展開してきた最大産業，綿工業の景気動向であった。しかし，この段階の末期に位置する60年代の綿工業は，当時最大の棉花供給国であったアメリカにおける南北戦争（1861年4月—65年4月）に起因した「棉花飢饉」（Cotton Famine）によって，その蓄積を大きく歪められた。イギリスのアメリカからの棉花輸入量は，62年に60年の3％にも満たないまで減少した。その後，インド，エジプト，ブラジル等の諸国からの輸入を増加させたが，南北戦争終結までイギリスの棉花輸入量は60年の水準に遠くおよばなかった。この棉花不足により，棉花価格の上昇は投機的な価格騰貴に増幅され，最高値を記録した64年7月には60年の水準を4倍強上回っていた。また，アメリカ棉に替って大きく輸入を伸ばしたインド棉は，品質が劣悪で，産業革命以降アメリカ綿に適合するように改良が加えられてきた梳棉機，紡績機，織機等の性能を著しく低下させた。このことは，綿工場主に，イ

ンド棉に適合するための紡織機等の改良に多額の出費を強いた。さらに，綿製品輸出も，対米輸出量の著減に加えて，相対的高価格ゆえの国内外市場の縮小により大きく減少した。[注]

本稿では，かかる状況下にあったイギリス綿工業が，南北戦争終結とともに「棉花飢饉」から立ち直り，66年5月の恐慌勃発の時までどのような過程を経て回復していったのか，そしてまたその回復が，前循環のピークを凌駕する程の規模にまで達しなかったのはいかなる理由によるものであるか，という点を分析した。そのさい，リヴァプール市場における棉花価格とマンチェスター市場における綿糸布価格の変動を月別に示し，その変動を規定した要因を明らかにすること，すなわちコスト・価格関係の推移を中心に据えて綿工業の景気過程を分析するという方法をとった。

なお，時期区分は，ここでの方法に照応して，棉花価格がピークに達した64年7月を含む64年1月からの価格高騰期とその後の10月までの急落期を第1期，南北戦争が終結した65年4月までを第2期，さらに恐慌が勃発した66年5月までを第3期とした。最後に，恐慌後の綿工業の動向を，次の不況期への展望ということで「むすび」として述べた。

注 詳細は，拙稿「棉花飢饉とイギリス綿工業」(『明治大学大学院紀要』第20集，1982年）を参照されたい。

I 第1期（1864年1月―10月）

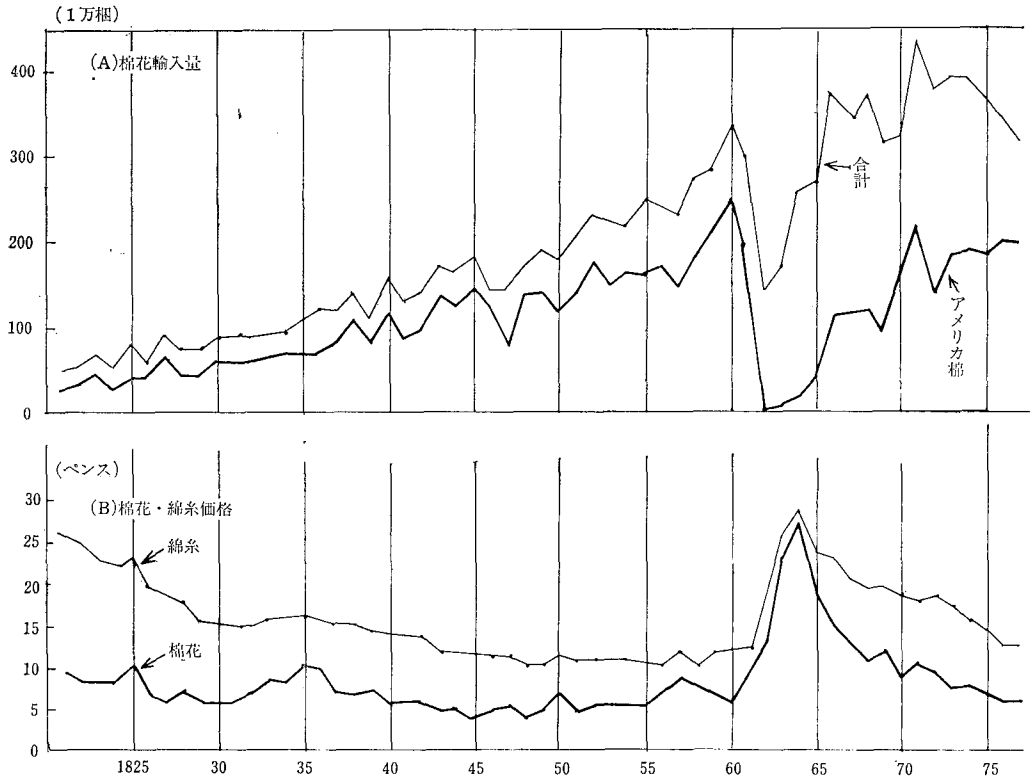
「棉花飢饉」期（1862-65年）のイギリス綿工業の蓄積を規定した最大の要因は，アメリカの南北戦争の戦況に関する情報によって目まぐるしく変動した，棉花価格の動きであった。このことは当然，1864年のイギリス綿工業でも同様であった。しかし，同年はこれに加えて，対欧州大陸綿製品輸出に暗い影を落とした，ドイツとデンマークの間で勃発したシュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争（Shleswig-Holstein war）の影響も，南北戦争程ではないにしても，見落せないものであった。また62年の株式会社法改正以降に設立された，多数の「金融会社」[(1)]（finance company）の資金によって大規模に推進された国内鉄道建設を中心として，製鉄業・鉄工業・造船等の諸産業は64年に活況的様相を呈していた。このことは，高価格水準によって制約されたとはいえ，国内における綿製品需要をある程度高めた。さらに50年代以降，欧州大陸に替ってイギリス綿製品の最大の輸出先になっていたインドの購買力も綿工業の蓄積を左右する要因としては大きなものであった。[(2)]

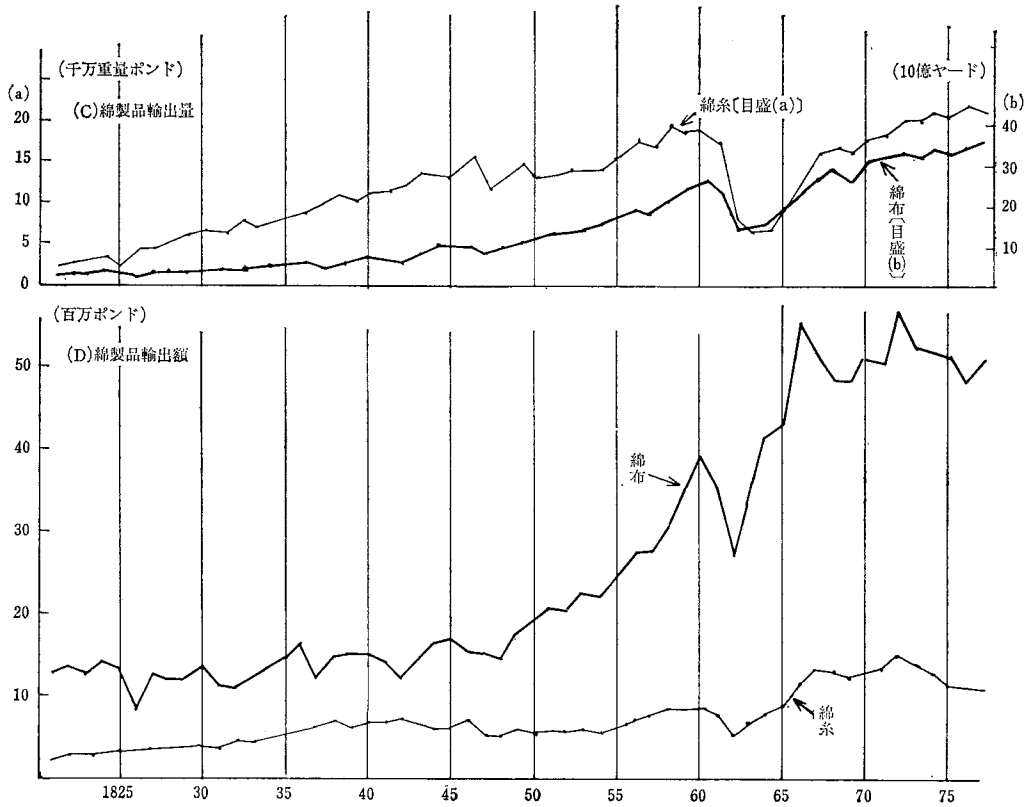
1864年1月1日のリヴァプール市場における棉花価格は，「棉花飢饉」以前の61年の水準をやく4倍も上回る1重量ポンド当り27½ペンス（以下では「1重量ポンド当り」を省略する）まで高騰していた（図1）。[(3)] 64年は南北戦争継続中のアメリカからの棉花輸入の増加は期待できなかったが，62年から徐々に増えつつあったインド，エジプト，ブラジル等の棉花供給国からの輸入が増加し，総輸入量は63年を大きく上回り，その結果，棉花価格が急落することが予想された。ランカシャーの紡績業者，織布業者は，この棉花価格下落によって，数年続いた苦境から脱することができる

表 1　鉄工業，造船，鉄道建設の動向

年	銑　鉄	造　船		鉄道新設
		木造帆船	鉄製蒸気船	
	(十万トン)	(十万トン)		(km)
1859	37	1.51	0.61	741
60	38	1.58	0.68	693
61	37	1.30	0.78	702
62	39	1.64	0.98	1,098
63	45	2.54	1.24	1,240
64	48	2.75	1.86	752
65	48	2.37	2.12	805
66	45	2.11	1.68	909
67	48	1.80	1.26	632

出所　銑鉄生産量は，*Statistical Tables and Charts*, Relating to British and Foreign Trade and Indurtry, Vol. 3, pp. 168-9, 造船は，ibid., p. 103, 銑道建設は，エリ・ア・メンデリソン，飯田他訳，『恐慌の理論と歴史』，青木書店，1969 年，第 1 分冊，351-2 ページ。



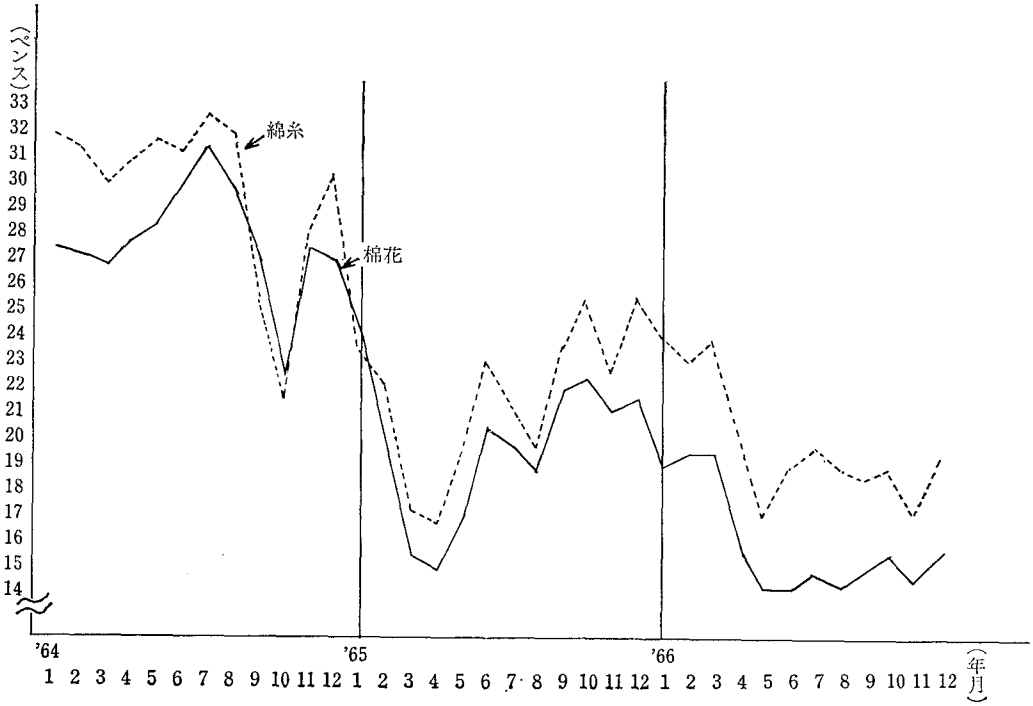


出所 棉花輸入量および棉花価格は，T. Ellison, *The Cotton Trade of Great Britain*, Frank Cass, London, 1886, Table 1, その他は，ibid., Table 2 より作成。

図 1 イギリス綿工業関係諸指標，1821—77 年

とは考えず，むしろ逆に棉花価格の下落が，綿糸布価格のそれ以上の下落を招くと考えた。[4] それゆえ，在庫は棉花であろうと，綿糸布であろうと最小限にとどめておくことが得策であると考えた。実際，ランカシャーの中心都市マンチェスターの地方新聞マンチェスター・ガーディアン (Manchester Guardian) は，1 月末に，「64 年の棉花輸入は 63 年をはるかに上回るであろうが，価格下落を恐れて，生産はむしろ減少するのではないか」と論評した。[5] また，マンチェスターのコミッション・エージェント[6] (commission agent)，ジョージ・スパッフォード (George Spatford) は，1 月 21 日付の私信で，「この数年で在庫は最も少ない」と述べている。[7] 64 年初頭の棉花輸入の増加に対応した棉花価格の下落の予想を，綿工場主達は素直に歓迎できなかった。なぜなら，マンチェスター・ガーディアンの論調に端的に示されているように，異常な高水準を継続していた綿製品価格が，棉花価格の下落に刺激されて低下することを恐れた綿製品ブローカーの在庫の放出によって，棉花価格を上回る規模で低下するのではないか，と綿工場主は考えたのである。

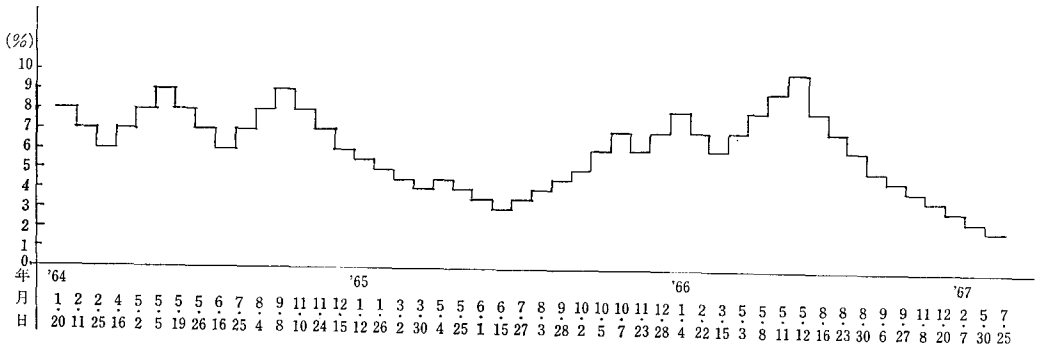
64 年 1 月のリヴァプール市場における棉花価格は，輸入の増加に対応して平均やく ½ ペニー低



(注) 棉花はアメリカ棉1重量ポンド当りの価格。綿糸は32番手経糸の1重量ポンド当りの価格。
出所 John Kelly, 'The End of the Famine: the Manchester Cotton Trade, 1864−67 —— a Merchant's Eye View.', ed. by N. B. Harte and K. G. Ponting, *Textile History and Economic History*, Manchester, Manchester University Press, 1973, p. 359, p. 364, p. 370より作成。

図 2　1864-66 年の各月末の棉花，綿糸価格

下したが，マンチェスター市場の綿糸価格は1重量ポンド当り1-2ペンス（以下「1重量ポンド当り」を省略する）低下した。[8] 1月の織布価格の下落幅は綿糸のそれを上回った。[9] 1月に棉花価格の下落を上回る規模で綿糸布価格を押し下げたのは，国内外市場における需要の減少であった。国内では，先に述べた在庫保有者の売り急ぎに加えて，市場を収縮させた次のような要因があった。イ



出所 John Clapham, *The Bank of England, A History 1797—1914*, vol. II, pp. 429—31 より作成。

図 3　イングランド銀行のバンク・レート

表 2 イギリスから棉花供給国への金銀流出額

(千ポンド)

国＼年	1861		1862		1863		1864		1865		1866	
	金	銀	金	銀	金	銀	金	銀	金	銀	金	銀
中国	――	1,021	――	3,806	――	2,586	――	1,698	――	863	――	389
インド	――	6,258	――	6,903	――	6,229	――	4,610	――	2,944	――	2,148
アメリカ	7,297	84	36	――	40	14	185	――	61	4	1,014	――
ブラジル	20	150	409	43	1,681	50	927	142	1,271	165	945	88
トルコ	1	――	1,124	905	35	――	――	――	――	――	――	――
エジプト	796	――	1,919	――	3,473	――	2,060	――	580	――	457	――
計	8,114	7,513	3,488	11,657	5,229	8,879	3,172	6,450	1,912	3,976	2,416	2,625

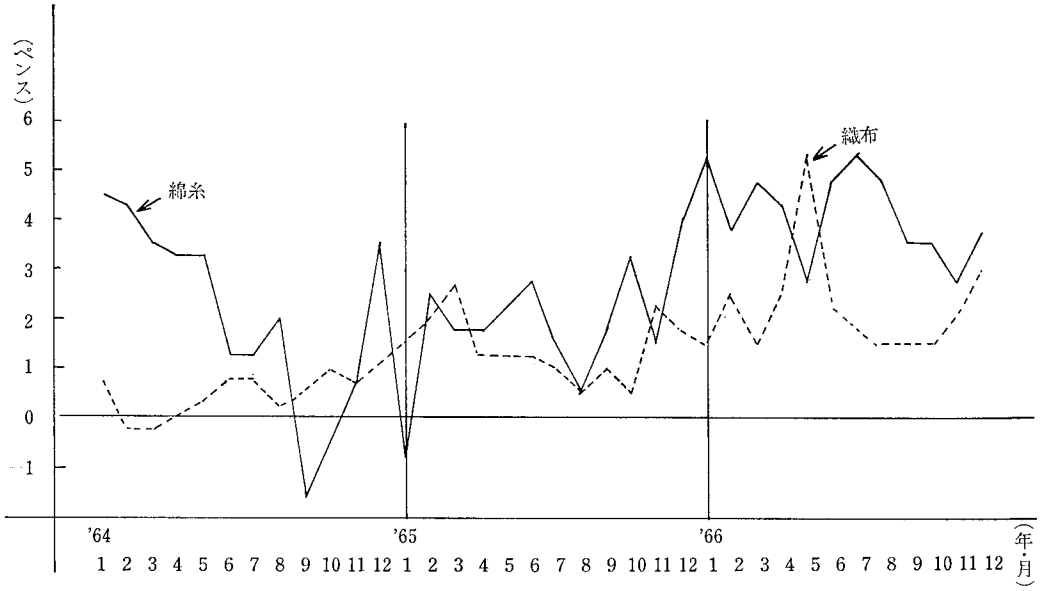
出所 C. H. R. of 1886, p. 43.

ンド，中国，エジプト，ブラジル等の棉花供給国に棉花代金として大量の金銀が支払われ[10]，イングランド銀行の金属準備が減少し，1月20日にバンク・レートが8％に引き上げられた。この結果，綿製品ブローカーによる取引が減少した。なお，当時イギリスは棉花代金を，インド・中国には銀で，ブラジル・エジプトには金で支払っていた。したがってこれら諸国からの棉花輸入の増加に対応して，金銀の輸出は「棉花飢饉」期にはかなりの額に達した（表 2)。

綿糸輸出は63年12月の700万重量ポンドから，64年1月には470万重量ポンドに減少し，織布輸出も同期間に1億6,890万ヤードから1億1,460万ヤードに減少した[11]。この輸出の減少の大部分は，対インド輸出の減少と，シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争の影響による対ドイツ輸出の減少によるものであった[12]。

バンク・レートが2月11日に7％へ，さらに25日には6％へと引き下げられたが，ドイツおよびインド向け輸出の停滞によりランカシャーの綿製品生産および取引は増加しなかった[13]。2月のマンチェスター市場における高級織布の価格は，国内市場の若干の回復もあり1月の水準を維持していたが，低級織布の価格は1反当り 3-4 ½ ペンス低下し[14]，同月に織布業者の利潤マージンは大きく減少した。

3月の最初の2週間，この継続的な棉花価格の下落から，多くの在庫保有者が手持ちの在庫を放出し，価格は2ペンス低下した。しかし，この相対的に低価格の棉花を紡績業者が大量に購入し，第3週には第2週のやく3.5倍に相当する7万6千梱が市場で取引され，価格は再び上昇した。しかし，対インド輸出の停滞が続いていたため，3月の棉花価格は2月を ½ ペニー下回っていた。綿糸布価格もそれぞれ，1ペニー，7 ½ - 10 ½ ペンス（1反当り）低下した。このように，64年の第1四半期に，棉花価格の低落を上回る綿製品価格の下落により，紡績業者，織布業者の利潤マージ



出所 (図 2) と同じ。

図 4　製品1重量ポンド当りの利潤マージン

ンは低下傾向を示した。

4月に入ると棉花価格は上昇傾向を示し始めた。これは輸出需要が増加し，紡績業者による棉花購入が大きく伸びたためであった。シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争にたいするイギリス政府の中立声明が，欧州大陸向け綿製品輸出を促進し，さらに対インド輸出も増大した。[15] 4月の綿糸輸出量は，1月を210万重量ポンド上回って680万重量ポンドに達した。織布輸出も1月を2,900万ヤード上回り1億4,360万ヤードに増加した。[16] 4月に綿糸価格はやく1ペニー上昇したが，棉花価格はブラジル棉，エジプト棉でやく2ペンス上昇し，紡績業者の利潤マージンは縮小した（図 3)。これは棉花需要の増加に対応して棉花にたいする投機活動が活発化し価格をつり上げたからであった。4月のリヴァプール市場における棉花取引は週平均7万7千梱，最終週には9万6千梱まで増えたが，紡績業者が購入したのはその⅔弱にすぎなかった。[17] そしてこの棉花にたいする活発な投機活動が，64年9-10月に綿工業を襲った倒産の嵐のきっかけとなった。なお4月16日にバンク・レートが7％に引き上げられたが，投機活動を鎮静させる効果は，ほとんどなかった。[18]

バンク・レートが5月2日に8％へ，5日には9％へ上昇し，リヴァプール，マンチェスター両市場における取引は慎重になり棉花および綿糸布価格は若干低下したが，第2週に入ると，シュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争の終結により市場は再び活気を取り戻した。さらに東洋諸国からの綿製品需要の増加と，棉花，綿糸布在庫の急速な縮小により，投機活動が一層活発化した。[19] しかし，5月の第3週に南北戦争における北軍優利の情報が到着し，価格は低下に転じた。[20] バンク・レ

ートは5月18日に8％へ，そして25日には7％へ引き下げられたが，これは価格低落の幅を小さくしただけであった。5月の棉花と綿糸布の価格上昇はほぼ同じ割合で，利潤マージンは4月とほとんど変わらなかった（図3）。

6月にアメリカと欧州大陸の2つの戦争に関する情報が，紡績業者の利潤マージンを大幅に縮小させた（図3）。第2週には，5月とは逆に，南北戦争が膠着状態に陥っているという情報が到着し，棉花価格を上昇させた。他方，第3週にはシュレスヴィヒ・ホルシュタイン戦争の戦後処理の話し合いが決裂し，イギリスが紛争に巻き込まれるのではないかという懸念から，マンチェスター市場は沈滞し，綿糸価格が低下した（図1）。この結果，紡績業者の利潤マージンが一挙に縮小し，かなりの数にのぼる紡績業者の倒産が報告された。[21]

6月末にイギリス政府は，欧州大陸の戦争の戦後処理に伴なう紛争に加わることはない，と発表した。さらに7月に入って東洋市場からの綿製品需要が再び増加し，リヴァプール市場における棉花取引は7月の最初の2週間で20万梱に達した。[22] マンチェスター市場における綿糸布価格は，輸出の伸びによる需要増で上昇したが，投機的価格騰貴を伴なった棉花価格の上昇が，製造業の利潤マージンを6月の水準にとどまらせた（図3）。なお7月に棉花，綿糸布とも価格は，「棉花飢饉」期中の最高値を記録し，[23] これ以降，長期的な低落傾向を示した。[24]

7月末に始まった棉花価格の下落は，9月に入ってその速度をはやめつつ10月の第3週まで続いた（図1）。同期間にアメリカ棉，エジプト棉等の長繊維上質棉花でやく30％，インド棉，中国棉に代表される低級棉花でやく50％の価格下落を経験した。[25] 6月に始まり7月に本格化した棉花にたいする投機活動は，貨幣市場を圧迫し，バンク・レートは7月25日に7％へ，さらに8月4日には8％へ上昇した（図2）。この結果，リヴァプール市場における棉花取引は縮小し，さらに8月の第2週に，南北戦争終結のうわさが同市場における棉花価格を若干押し下げた（図1）。他方，7月までの綿製品価格の高騰により，インド向け輸出が減少し，[26] 織布価格は1反当りやく1シリング低下した。[27] マンチェスター・ガーディアンは8月末に，織布業者の倒産が起っていると報じている。[28] しかし綿工業を襲った倒産の嵐は，9月に入って本格化した。

9月に綿工業が被った大打撃のきっかけは，9月1日のタイムズ紙（The Times）の記事がつくったものであった。同紙のアメリカ特派員が「南北戦争終結真近か」という記事を送ってきた。さらに同紙は，近日中にバンク・レートが12-15％に引き上げられる，という予想を発表した。南北戦争が実際に終結したのは65年4月であったから，タイムズのこの記事は誤報であったのだが，その影響は強烈なものであった。9月9日までの2週間にリヴァプールに到着した20万梱の棉花は，まったく販売されなかった。[29] 9月の第3週までに価格は，棉花で6ペンス，綿糸で9ペンス，織布で5シリング(1反当り)低下した。[30] 第4週に，棉花輸入商が棉花ブローカーあてに振り出す「ブローカー手形」の割引を主な業務にしていたリーズ銀行（Leeds Banking Company）が支払停止に

追い込まれ[31]，パニック的様相は一層深まった。9月の第2週にコミッション・エージェント，スパークフォードは，彼が商会を起こした1846年以降初めて注文が一件もなかったと私信で述べている[32]。9月の綿糸布生産量は，7月の半分に著減した[33]。棉花ブローカーは紡績業者にたいして，数ケ月前の棉花の売買契約の履行をせまったが，多くの紡績業者にはその支払能力がなかった[34]。9月始めから10月中旬までに，およそ40の織布業者が倒産した。10月18日から25日までの1週間だけでも，11の織布工場が操業を停止した[35]。なお，10月18日には「棉花飢饉」が始まって以来，棉花消費量は最低を記録した[36]。製品価格の下落に耐えきれなくなった投機家が，在庫を売りに出，マンチェスター市場における取引は攪乱された[37]。10月だけで価格の下落は，棉花で9ペンス，綿糸で10ペンス，織布で7シリング6ペンス（1反当り）におよんだ[38]。

64年4月から8月までは，同年の第1四半期とは逆に，輸出需要の増加により綿製品価格は上昇したが，他方，棉花価格の上昇は，投機的な価格騰貴によって増幅され，綿製品価格の上昇を上回った。9月には，南北戦争の戦況をめぐる誤報から棉花価格は急落したが，綿製品価格は，8月の高価格に起因した対インド輸出の著減と，綿製品ブローカーによる在庫の投売りによって，棉花価格を上回る規模で暴落した。

注 (1) 金融会社の形成過程および活動分野に関しては，つぎの文献を参照されたい。田中俊宏「1860年代のイギリス金融会社の企業活動――その活動分野と地域――」（福岡大学『経済学論叢』第26巻第2号），W. T. C. キング，藤沢正也訳『ロンドン割引市場史』，日本経済評論社，1972年，第7章。

(2) *The Economist*, Commercial History and Review（以下 C. H. R. と略記する）of 1865, p. 25.

(3) W. O. Henderson, *The Lancashire Cotton Famine, 1861-1865*, Manchester, Manchester University Press, 1934, pp. 122-3.

(4) Kelly, op. cit., p. 357.

(5) *Manchester Guardian*（以下，M. G. と略記する），28 January, 1864.

(6) コミッション・エージェントは19世紀中葉のランカシャーで活躍していたが，その業務内容は，綿製品取引，綿工場主への資金貸付一通常彼らはバンク・レートとは関係なしに5％の利子で資金を貸付けた一，および情報提供の3つであった。(cf. Kelly, op. cit., pp. 354-55.)……。

(7) Ibid., p. 357.

(8) C. H. R. of 1864, p. 20.

(9) M. G., 2 February, 1864.

(10) C. H. R. of 1864, p. 1.

(11) Ibid., p. 25.

(12) Ibid., p. 21.

(13) Kelly, op. cit., p. 358.

(14) C. H. R. of 1864, p. 20.

(15) Ibid.

(16) Ibid., p. 25.

(17) Ibid., p. 21.

(18) 4月16日から5月5日までのやく半月間にバンク・レートは9％まで上昇したが，これは新株式会社

設立に伴なう資金需給の逼迫に対処したものであり，棉花投機に起因したものではなかった。(cf. C. H. R. of 1864, p. 2.)

(19) C. H. R. of 1864, p. 21.

(20) Ibid.

(21) M. G., 6 July, 1864.

(22) C. H. R, of 1864, p. 22.

(23) Henderson, op. cit., pp. 122-3.

(24) 64年7月を境に棉花価格は，「大不況期」(1873-96年) 後の1898年まで長期的な低落傾向を示した。

(25) C. H. R. of 1864, p. 22.

(26) M. G., 24 August, 1864,

(27) Kelly, op. cit., p. 359.

(28) M. G., 24 August, 1864.

(29) C. H. R. of 1864, p. 21.

(30) Kelly, op. cit., p. 360.

(31) C. H. R. of 1864, p. 21.

(32) Kelly, op. cit., p. 361.

(33) M. G , 4 October, 1864.

(34) M. G., 19 October, 1864.

(35) Ibid.

(36) Ibid.

(37) Kelly, op. cit., p. 362.

(38) C. H. R. of 1864, p. 21.

II 第2期 (64年11月―65年4月)

64年10月の第3週の後半に，棉花価格の暴落は一応終息し，棉花投機が再燃した。10月の第4週だけで価格は2―3ペンス上昇した。[1] 11月に入っても棉花価格の上昇は続いた。特に，第2週には，バンク・レートの8%への引下げと，南北戦争終結の見込みはないという情報の到着が，リヴァプール市場を活気付けた。この週だけで棉花価格は1―2ペンス上昇した。第3週には，リンカーン大統領再選の知らせが到着し，南北戦争継続は確実なものとなった。第3週から月末にかけて棉花価格は，さらに2―3ペンス上昇した。マンチェスター市場における綿糸価格も，南北戦争に関する一連の情報に刺激されて上昇した。特に，第3週以降の上昇は大きく，11月中の綿糸価格の上昇は，棉花価格のそれを凌駕する規模であった。同月，棉花価格は，アメリカ棉，エジプト棉で5½ペンス，上昇したが，綿糸価格は，中質綿糸で6ペンス，上質綿糸で7ペンス上昇した。[2] 一方，織布価格は，対インド輸出の不振により，綿糸価格の高騰に対応できなかった。[3] このため11月中も，インド向け低級織布を生産している小規模織布工場を中心に，織布業者の倒産は継続した。[4]

12月には，織布業者による綿糸購入が大きく減少し，綿糸価格を押し下げた。棉花価格も同様の

要因で低落したが，さらに，同月中旬に棉花在庫量が過少評価されていることが発見され，それ以降，投機的売買が縮小した。[5]

1865年1月以降の検討に入る前に，ここで，棉花消費量，綿製品生産・輸出，労働者の就業状態といった諸指標を用いて，64年の景気動向を63年との比較で概観しておく。

64年12月末に棉花価格は，「棉花飢饉」期の最高値を記録した同年7月の水準を，アメリカ棉で17％下回っていた（前掲<図2>参照）が，インド棉の低下は21％にもおよんだ。[6] これは，「棉花飢饉」期のはじめの頃（1862—3年）にインド棉に適合するように紡織機等に改良が加えられたとはいえ，その品質の劣悪さはランカシャーにとっていかに不都合なものであったかを示すものであ

表 3　産出国別の棉花在庫量，64年末と63年末の比較

（百梱）

国	港湾		紡績業者		合計	
	64年	63年	64年	63年	64年	63年
アメリカ，エジプト，ブラジル	738	755	163	156	898	919
インド	4,079	2,190	600	324	4,679	2,514
中国	940	330	140	20	1,080	350
合計	5,757	3,275	900	500	6,657	3,775

出所　C. H. R. of 1864, p. 23.

表 4　産出国別棉花輸入量

（梱）

国＼年	1862	1863	1864	1865	1866
アメリカ	71,750	131,900	197,776	461,927	1,162,745
ブラジル	133,810	137,900	212,192	340,261	407,646
エジプト	131,750	204,270	257,102	333,575	167,451
トルコ	14,800	44,430	61,793	80,303	32,770
西インド	20,470	23,000	59,645	131,120	111,826
インド	1,069,440	1,228,900	1,399,514	1,266,525	1,847,759
中国，日本	2,980	161,800	399,074	141,610	18,844
計	1,445,000	1,932,200	2,587,096	2,755,321	3,749,041

（注）1梱当りの重量が国により若干異なるので，各国の輸入総量に占める割合は，この表の数値と若干異なる。

出所　C. H. R. of 1866, p. 24.

る。64年にインド棉は，やく140万梱輸入されたが，その内綿糸に姿を変えたのはやく90万梱，⅔弱にすぎなかった。[7] 63年末と比べて64年末のインド棉や中国棉といった低品質棉花の在庫量は，アメリカ棉，エジプト棉，ブラジル棉等の上質棉の在庫が若干減少したのと対照的に，ほぼ2倍増加した（表3)。

64年の棉花輸入総量は，やく259万梱であったが，これは63年を22%上回った。しかし63年の輸入量は62年を30%上回っていたのでその増加幅は，それ程大きかったとはえない。輸入額でみると，64年は8400万ポンド（1重量ポンド当り22½ペンスで換算）であったと推計できるが，これは63年の推計値5960万ポンド（1重量ポンド当り20½ペンスで換算）をかなり上回ったことになる。

棉花輸入量を国別にみると，まずアメリカからの輸入は大方の予想を裏切って，63年を6万6千梱も上回った（表2)。この増加は上半期に集中した。[8] 下半期には北軍の軍艦による積出港封鎖が，一段と強化されたためであった。インド棉の輸入は悪天候による不作[9]のゆえに17万梱しか増加しなかった。[10]

棉花消費量は，64年に63年を10%上回った。さらに，総消費量に占める高級棉の割合も，63年の34%にたいして64年には42%へ増加した。[11] 64年の綿製品輸出量は，63年を綿糸，織布でそれぞれ，2.25%，4.5%しか増加していない（表5)。これは64年の綿工業の拡大は，国内需要の増大によるものであったことを示している。64年の織布輸出は，63年をやく4千万ヤード上回ったが，その大

表 5 綿製品国内消費量の推移

（百万重量ポンド）

年	生 産	輸 出	国内消費	国内消費の割合（%）
1859	878.94	710.31	168.63	19.2
60	975.24	757.26	217.97	22.4
61	906.66	701.40	205.25	22.6
62	404.54	345.48	58.96	14.6
63	456.80	387.35	69.44	15.2
64	511.08	383.91	127.17	24.9
65	646.58	499.77	146.81	22.7
66	824.13	664.09	160.03	19.4
67	859.68	747.25	112.42	13.1
68	886.86	779.39	107.46	12.1

出所 E. Helm, *The Cotton Trade of the United Kingdom, during the seven years,* 1855-61; with remarks on the Return of Factories existing in 1868, *Journal of the Statistical Society,* vol. 32, 1869, p. 437.

表 6　綿製品輸出，仕向地別内訳

(A) 織布（百万ヤード）

仕向地＼年	1862	1863	1864	1865	1866
ドイツ，オランダ	70.8	51.9	45.3	84.1	103.5
フランス	44.7	17.7	19.6	21.5	54.3
ポルトガル	29.3	38.7	33.7	42.5	54.6
ジブラルタル，マルタ	27.0	33.4	30.4	32.4	36.1
イタリア，オーストリア	61.4	62.2	51.9	60.9	68.8
トルコ，シリア，エジプト	224.9	317.6	301.0	305.0	468.6
西南アフリカ	34.6	16.3	20.8	19.8	23.2
英領北アメリカ	32.5	23.7	27.6	30.2	39.2
アメリカ合衆国	97.4	71.6	64.1	122.4	108.0
西インド，中央アメリカ	144.1	169.1	197.4	189.9	209.4
ブラジル	107.9	91.6	146.3	114.6	169.5
ブラジルを除く南アメリカ	63.1	69.4	112.1	87.6	145.0
中国，香港	80.6	46.5	73.5	126.3	196.5
ジャワ，フィリピン	40.7	30.4	40.6	60.0	93.0
インド	514.7	559.8	477.0	562.6	613.5
オーストラリア	34.0	23.6	17.9	25.6	30.8
その他	83.6	83.0	89.7	129.6	142.0
計	1,681.3	1,706.5	1,748.9	2,015.0	2,556.0
合計額（百万ポンド）	28.6	37.5	43.9	44.8	57.5
(B) 綿糸（百万重量ポンド）					
ドイツ，オランダ	49.0	26.8	29.9	47.0	57.5
イタリア，オーストリア	10.6	9.5	9.9	14.5	19.0
トルコ	5.6	6.1	6.8	8.0	10.7
中国，香港	3.2	2.1	1.9	1.0	4.6
インド	18.1	23.5	17.7	15.1	22.0
その他	6.7	6.6	9.5	17.8	25.3
計	93.2	74.6	75.7	103.4	139.1
合計額（百万ポンド）	6.2	8.0	9.1	10.3	13.6

出所　C.H.R. of 1866, p. 25.

部分はブラジル，エジプト，中国，西インド等の棉花供給地域の棉花輸入の増大に対応したものであった。なお，これら諸地域への綿製品輸出は，8月までに集中し，9月以降は著減していった。[12]

綿業労働者の中で公的，私的に救済を受けていた者の割合は，62年のピーク時には25%に達していたが，64年8月には4.2%，やく8万3千人にまで減少したが，その後上昇し11月には，7.2%，やく15万人にまで増大した。[13] そして，9―11月に2万4千人の綿業労働者が解雇された。また同期間におよそ120の綿工場が倒産したが，その大部分は東洋市場，とくにインド向け低級織布を製造する小規模織布業者であった。[14]

65年1月の最初の2週間に，アメリカを除く棉花供給諸国から，リヴァプール港に8万6千梱の棉花が到着し，[15] 月末に同港の在庫量は11万3千梱まで増加した。[16] この棉花輸入の増加と，南軍の各地での敗退の情報により，リヴァプール市場における棉花取引は減少した。1月だけで棉花価格はペンス下落した。この輸入増加と価格の下落にもかかわらず，綿糸布生産量は減少した。紡績業者，織布業者の倒産はまだかなりの件数におよんでいた。[17] 1月18日のマンチェスター・ガーディアンは，「この大量の棉花の大部分は，少数の大商人に保有されており，彼らは，価格上昇を見込んで紡績業者への販売を控えている」と報じた。[18] また，スパッフォードは，1月末に「64年10月以降でマンチェスターの不況は，今が最も深刻である」と私信で述べている。[19] 1月中に紡績業者の利潤マージンは，やく4ペンス低下した。

2月の第3週には，リンカーンと南部の代表による和平会談開催のニュースが届き，リヴァプール市場における棉花取引は，ほぼ完全に停止した。2月だけで棉花価格は，アメリカ棉で3ペンス，ブラジル棉で2ペンス，エジプト棉で1½ペニー，インド棉で1ペニー低下した。[20] この棉花価格の1月以降の急落は，多くの投機家を破産に追い込んだ。同期間に，綿製品価格も，棉花価格とほぼ同じ割合で低落したが，スパッフォードはその理由を，「棉花価格の下落により，欧州大陸諸国が，棉花輸入を伸ばし，綿製品生産量を増加させることによって，イギリスからの綿製品輸入を減少させることを綿工場主が懸念しているためだ」と述べた。[21]

3月に入ってもリヴァプール棉花市場の停滞は継続した。特に，第2週に，「南部の棉花積出港チャールストンが2月18日に陥落した」という知らせが届き，南部の劣勢は益々明らかとなり，市場の沈滞ムードに拍車がかけられた。棉花価格は，17日から29日の間に，2½ペンス下落した。3月を通じて棉花価格は，アメリカ棉で4½ペンス，その他の高級棉で5¼ペンス，インド棉で4―5ペンス下落した。[22] 一方，綿糸布価格は3月にそれぞれ3½―4½ペンス，2―3シリング（1反当り）下落した。

65年の1月から3月の間に棉花価格は暴落したが，綿糸布価格の下落も，ほぼそれに匹敵するものであった。したがって，この棉花価格の暴落期にも紡績業者，織布業者の利潤マージンは僅かに上昇しただけであった。綿工場の倒産は，64年の9月から10月におよそ100件におよんだが，65年

の1月から3月までにさらに200件を超えた[23]。ここでも倒産した綿工場の大部分は，62—3年に改良された生産性の高い力織機を購入した，比較的資本規模の大きな織布業者に対抗できなかった，旧式の力織機で織布を生産していた小規模織布業者であった[24]。4月8日にマンチェスター・ガーディアンは，64年10月から65年3月の半年間の損失によって憶病になり，4月に入っても操業を再開しようとしない綿工場主の消極さをきびしく非難した[25]。

4月15日の土曜日に南部連合政府は首都リッチモンドを撤退し，南北戦争は実質的に終結した。この情報は翌週の月曜日17日にイギリスに到着し，この日だけで棉花価格は2ペンス，綿糸布価格もそれぞれ，2½—3ペンス，1—2シリング（1反当り）下落した[26]。しかし，4月17日を境にしてイギリス綿工業は，異なる局面を迎えた。

注 (1) C. H. R. of 1864, p. 22.
(2) M. G., 17 November, 1864.
(3) C. H. R. of 1864, p. 22.
(4) Ibid.
(5) Ibid.
(6) Ibid.
(7) Ibid., p. 23.
(8) Ibid.
(9) C. H. R. of 1865, p. 23.
(10) M. G., 12 March, 1867.
(11) C. H. R. of 1865, p. 23.
(12) Ibid.
(13)「工場監督官報告」(*Inspectors of Factories*), Alexander Redgrave's Reports, 30 th April, 1866.
(14) C. H. R. of 1865, p. 23.
(15) C. H. R. of 1865, p. 19. アメリカ棉の輸入は，64年下半期以降に一段と強化された積出港封鎖により，ほとんどなかったと思われる。
(16) Ibid.
(17) Ibid.
(18) M. G., 18 January. 1865.
(19) Kelly. op. cit.. p. 363.
(20) C. H. R. of 1865, p. 19.
(21) Kelly, op. cit., p. 364.
(22) C. H. R. of 1865, p. 19.
(23) Ibid.
(24) Kelly, op. cit., p. 384.
(25) M. G., 8 April, 1865.
(26) C. H. R. of 1865, p. 20.

Ⅲ 第3期（1865年5月―66年5月）

64年9月から65年4月までの棉花価格の暴落が，戦争終結によりアメリカ南部の棉花が大量に流入するのではないかという恐れ，といった多分に心理的なものであったことはすでにみたが，5月から8月にかけての価格上昇も，65年度のアメリカの棉花収穫量をめぐる様々な憶測によるものであった。綿工業関係者は，アメリカ棉の供給が戦前の水準に回復することに疑問をいだいた。なぜなら，彼らは奴隷解放後の黒人が従来通り棉花生産を行なうとは考えられなかったからである。[(1)] 5月以降に65年度収穫分の棉花にたいする先物取引が活発化した。5月12日付のマンチエスター・ガーディアンは，棉花価格を大きく低下させる要因は何も存在しないという記事を載せている。[(2)]

5月に棉花価格は，2ペンス上昇した。（図3）。綿糸価格もほぼ同じ割合で上昇したが，これは多分に将来の価格上昇を見込んでの投機的売買に起因したものだった。[(3)] 一方，1月から3月にかけての綿糸価格の暴落期に，東洋市場向の低級織布の増産を行った小規模織布業者は，この綿糸価格の上昇を織布価格に転化できなかった。東洋市場の需要が著減してしまったからである。[(4)]

「棉花飢饉」期にイギリス経由で，棉花を再輸入していたニューヨーク市場は，7月に入って南部から直接棉花を購入し始めた。[(5)] このため，リヴァプール市場における棉花価格は7月と8月に若干低下したが，それも½ペニーにすぎなかった。だがインド向輸出の減少による，織布価格の下落は大きく，同期間に織布業者の利潤マージンは低下していった。

64年9月のタイムズ紙の誤報に端を発し，65年4月の南北戦争終結時まで続いた棉花価格の長期的低落と，戦後から9月まで続いた棉花価格の上昇期に産業資本も商業資本も幾度となく試行錯誤を繰り返し，この1年間に双方とも大きな損失を被った。特に，この期間におよそ300の小規模織布業者が倒産した。他方紡績業者は比較的資本規模も大きく，59―61年の好況過程で高利潤を獲得していたため，倒産件数は極めて少なかった。同様に「棉花飢饉」期の始めの頃（61年末―62年春）に，在庫製品を売りつくした輸出業者も，この苦境を乗り切ることができた。しかし，「棉花飢饉」期にイギリス綿工業が大きな損失を被ったことは明らかである。[(6)] たとえば，「棉花飢饉」期の主要棉花供給国であったインド，エジプト，ブラジル，中国の4国とイギリスの貿易額を，60年と64年で比較してみると，60年のこれら4国からの輸入額が3700万ポンドであるのにたいして，64年には5760万ポンド増加して，9460万ポンドに達した。他方，輸出額は，60年の3030万ポンドから64年の3830万ポンドに800万ポンドしか増加していない。[(6)]

9月の第3週に，ニューヨークからの大量の棉花注文と，マンチェスター市場の綿糸布取引の増大の双方により，リヴァプール市場では18万4千梱におよぶ棉花が取引され，[(7)] 価格を1¼ペニー押し上げた。この傾向は9月末まで続き，価格はさらに2ペンス上昇した。[(8)] 9月に棉花価格は高級棉

で5½ペンス，低級棉で4¾ペンス上昇した。[9] 他方，9月に綿糸価格，織布価格は，それぞれ4―5ペンス，2―3シリング上昇した。[10] これは同月の棉花価格の上昇を上回り，紡績業者，織布業者の利潤マージンを上昇させた。綿製品価格の上昇をもたらしたのは，当初アメリカ向輸出の増大であったが，続いてほとんど世界中からの綿製品需要の増加と，さらに国内市場の拡大によるものであった。この綿製品にたいする需要の急増により，製品在庫が不足気味となり，綿糸布にたいする投機活動が活発化した。この時期には棉花飢饉が始まって以来始めて，数ケ月先の注文契約が多数結ばれた。[11]

10月2日の午前中まで，このリヴァプール・マンチェスター両市場における活発な取引は継続した。しかし，正午にバンクレートが5％に引き上げられ，両市場の取引量は急減した。[12] その後の10日間でバンク・レートは3度にわたって1％ずつ上昇した。このため，市場における取引は一層縮小した。このバンクレートの上昇は，インドへの銀流出によってイングランド銀行の準備率が急激に減少したことによるものであった。この数ケ月の棉花価格の上昇が，インドからの棉花輸入量を急増させ，同国に棉花代金として銀が流出したのである。[13] しかしその後，アメリカ棉，エジプト棉の到着量が少ないのをみて，棉花価格は再び上昇傾向を示し始め，16日には65年の最高値を記録した。一方，綿工場主は，この棉花価格の上昇に比例した製品価格の上昇を獲得することができなかった。価格が上昇する以前に綿糸布を購入していた投機家が，それらを市場に放出したからである。[14]

11月から12月にかけて，大量の棉花輸入と，ニューヨーク市場における棉花価格の下落[15]による再輸出価格の低落により，リヴァプール市場の棉花価格は低下していった。マンチェスター市場の綿糸布価格は，国内外需要の伸び[16]にささえられて低落せず，利潤マージンは同期間に上昇していった。

ここで再び，65年の綿工業の景気過程を示す諸指標を64年と比較して概観しておく。65年の棉花価格の変動幅は，62年についで2番目に大きかった。[17] 1月から4月中旬まで急落し，その後6月末にかけて，やく50％上昇し，7月と8月に僅かに低落した後，9月から10月中旬までやく30％上昇した。最低を記録した4月中旬と10月中旬のピーク時では，価格差は2倍に達した。棉花の年平均価格は64年の22ペンスにたいして65年は15¾ペンスに低下した。[18] 他方，綿糸布の年平均価格の低下は，棉花と比べて相対的に小さく，同年に紡績業者，織布業者の利潤マージンが上昇したことがわかる。

65年の棉花輸入量は，やく276万梱であったが，これは64年を17万梱上回った。しかし南北戦争継続中の64年が63年を67万梱上回っていたことを考慮すれば，増加の割合は小さいといえる。これは，インド，中国からの輸入の減少がアメリカからの輸入増を相殺したからであった（表2）。このことは，アメリカ棉の供給が増し，品質の劣悪なインド棉にたいする需要が減少したためである。なお65年度収穫分のアメリカ棉は10―12月に大量にリヴァプールに到着した。

棉花消費量は，65年に64年を28％上回った。[19] 64年は63年を17％上回っただけであるから，65年の

表 7 対米繊維製品輸出量

(梱)

年 / 月	1860	1861	1862	1863	1864	1865
1 月	23,449	17,436	14,381	12,622	16,669	6,735
2 月	15,762	7,324	12,742	12,634	16,125	9,921
3 月	14,153	10,699	9,228	13,078	13,054	10,362
4 月	11,038	2,595	6,861	10,200	9,595	6,716
5 月	15,189	2,627	7,286	5,925	11,837	7,423
6 月	24,078	1,445	8,369	5,747	13,269	10,969
7 月	24,136	2,740	15,237	11,535	10.586	15,708
8 月	19,975	4,105	13,206	9,868	5,941	18,850
9 月	13,641	4,451	11,176	12,468	4,361	20,481
10 月	14,830	6,990	10,950	11,520	4,234	24,855
11 月	17,508	6,602	8,496	13,520	3,602	25,812
12 月	20,992	5,904	10,651	15,264	5,414	26,098
計	214,841	72,918	128,583	134,281	114,707	183,930

(注) 綿，羊毛，亜麻，絹製品の輸出量の合計。

出所 C. H. R. of 1865, p. 1.

綿工業の生産量は大きく増加したといえるだろう。

製品輸出も65年には64年を綿糸，織布でそそぞれ，26%，14%増加した。64年の増加率が綿糸布とも5%に満たなかったことからみて，65年の輸出の伸びは大きかった（表3）。織布輸出は64年を2億8300万ヤード上回ったが，その大部分は南北戦争終結後のアメリカへの輸出増に負うものであった。同国へは1億2240万ヤード輸出されたが，その内7400万ヤードは10—12月に集中した。[20]

綿製品の国内消費量も64年を1900万重量ポンド上回った。また生産量に占める国内消費の割合は，64年を若干下回ったが60—61年の好況期とほぼ等しかった。人口増を考慮に入れて1人当りの綿製品購入量を推計してみると，62年には3½重量ポンドであったのに比べて，65年には5重量ポンドまで増加したが，59—61年の好況期の6重量ポンドにはおよばない。[21] ただし，エコノミスト誌の推計によれば62—65年に綿業労働者にたいする賃金支払総額が，大量失業と生産性の低下により2800万—3000万ポンド減少[22]しているから，この5重量ポンドという数字は，他産業の活況を裏付けているとみてよいだろう。

65年の綿業労働者の就業状況を，中央救済委員会（Central Relief Commitee）の作成した報告書でみてみると，まず，1，2月の利潤マージンの低落期に失業中で救済金を受けとっていた者の数

が増加したが，その後の利潤マージンの回復期に被救済者数は着実に減少し，11月には，その数は「棉花飢饉」期以前の水準にまで減少した。[23] さらに，65年末の「工場監督官報告」は，「ランカシャーのいくつかの都市で労働力不足が深刻化し，それらの諸都市では賃金の上昇傾向がみられる」，と述べている。[24]

66年1月から5月の間に棉花価格は，やく5ペンス低下し，その後，年末まで低水準を保っていた。他方，同期間のマンチエスター市場は，国内需要の伸びと輸出の増加[25]に支えられて活気に満ちていた。完全操業を再開した工場がいくつか出始めた。[26] 棉花価格の低下は，輸入増に対応するものだったが，綿糸布価格の低下は棉花に比べて小さく，紡績業者，織布業者の利潤マージンはむしろ増加していった。「棉花飢饉」期にみられた，棉花価格の下落が始まるとすぐに綿糸布価格がそれを上回る規模で低落するという現象は，ここにきてみられなくなった。マンチェスター・ガーディアンは5月に，マンチェスター市場が，リヴァプール市場の影響を受ける度合が低下したことを歓迎する記事を載せている。[27]

このように66年5月までに綿工業は「棉花飢饉」から回復し「好況」的様相を示し始めていたが，ひとつ前の活況期の水準には遠くおよばなかった。66年を活況期の60年と比較してみると，綿糸布生産量で，やく1億5千万重量ポンド，綿糸布輸出量では，やく9千3百万重量ポンド下回っていた。恐慌後の6—10月に生産量を伸ばしていった[28]ことを考慮すると，66年6月の水準が活況期の60年をいかに下回っていたかが浮彫りにされよう。

注 (1) M. G., 16 May, 1865.
(2) M. G., 12 May, 1865.
(3) Kelly, op. cit., p. 365.
(4) C. H. R. of 1865, p. 21.
(5) Ibid.
(6) C. H. R. of 1865, p. 3.
(7) Ibid., p. 20.
(8) Ibid.
(9) Ibid.
(10) Ibid.
(11) Kelly, op. cit., p. 369.
(12) C. H. R. of 1865, p. 2.
(13) Ibid.
(14) Ibid., p. 21.
(15) Ibid.
(16) Ibid.
(17) Henderson, op. cit., pp. 122-3.
(18) C. H. R. of 1865, p. 22.
(19) Ibid., p. 25.

(20) Ibid., p. 3.
(21) C. H. R. of 1865, p. 24.
(22) Ibid., p. 22.
(23) Ibid., p. 2.
(24) 「工場監督官報告」Robert Baker's Reports, 30 th April, 1866, pp. 19-20.
(25) M. G., 20 February, 1866.
(26) Kelly, op. cit., p. 369.
(27) M. G., 5 May, 1866.
(28) C. H. R. of 1866, p. 3.

む す び

1866年5月10日に，当時の最大の金融会社オヴァーレンド・ガーニー商会（Overend, Gurney & Co.）が倒産し，これが引き金となって60年代に順調な拡大を遂げつつあった鉄道建設業，鉄鋼業，造船業を中心に恐慌に突入した。しかし，綿工業は5月以降9月まで生産量を順調に伸ばしていった。[1] 5月12日付のマンチェスター・ガーディアンは，「オヴァーレンド・ガーニー商会の倒産は，綿工業にほとんど影響をあたえなかった」，と述べている。[2] また，スパッフォードも5月31日付の私信で，彼自身この恐慌によって何ら損害を被っていない，と述べた。[3]

66年の綿製品国内消費量は，恐慌後の需要の低下[4]により，下半期に減少したが，上半期の大幅な伸びにより，65年を1,300万重量ポンド上回った。[5] 綿製品輸出も，欧州大陸，東洋諸国の双方向け輸出が大きく増加した（表3）。しかし，61年には棉花価格と綿糸価格が，それぞれ7½ペンス，12½ペンスであったのにたいし，66年は，棉花が15¾ペンス，綿糸が19¾ペンスと，依然として高水準であった。[6] この綿製品の相対的高価格は，羊毛，亜麻製品の競争力を高めた。59—61年の好況過程の平均値と比較した66年のこれら繊維製品の輸出増は，同期間の綿製品の輸出の減少をほぼ相殺している（表4）。

66年の5月までに生産能力を高めた綿工業は，10月には供給過剰による在庫の増大を経験してい

表 8 主要繊維製品の輸出量の推移

（重量ポンド）

	綿		羊 毛		亜 麻	
	紡績糸	織 布	紡績糸	織 布	紡績糸	織 布
1859～61（平均）	180,132	2,634,074	25,964	152,818	31,659	132,813
1866	139,100	2,556,000	27,000	280,000	37,500	258,000

出所 C. H. R. of 1866, p. 4 より作成。

る。インド向け低級織布の在庫は7月に増え始めている。[7] 10月10日付のマンチェスター・ガーディアンは，「現行の価格水準では，ランカシャーの供給能力は過剰である」，と書いている。[8] すなわち，66年の棉花，綿糸布の価格は，「棉花飢饉」期の異常な高水準から大きく低下したとはいえ，それ以前の水準までは下落せず，そのことが輸出の伸びに一定の限界を与え，ひいては，綿工業のより一層の拡大を阻害していたのである。

注 (1) C. H. R. of 1866, p. 3.
(2) M. G., 12 May, 1866.
(3) Kelly, op. cit., p. 371.
(4) 66年5月以降，鉄道建設，鉄鋼業，造船業を中心に雇用が大きく低下し，これら3部門では賃金が年末までに 10-12% 下落した。(cf. C. H. R. of 1866, p. 3.)
(5) Ibid., p. 23.
(6) Kelly, op. cit., p. 359, p. 370.
(7) Ibid., p. 372.
(8) Ibid.
(9) M. G., 10 October, 1866.